

まんだら通信

第211号 (通巻246号)

平成26年01月 西暦2014年 佛曆2580年 皇紀2674年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高樞 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

もう半分、まだ半分…

どういふわけか、年が改まると思いつき言葉があります。

標題の『もう半分…』です。

お酒を大好きな人が一升瓶を横目に見ながら、ちびりちびりと楽しんでるうちに、残りが半分になりました。

ここで、「残りが、もう半分しかなくなつてしまった」と思うのと、「まだ半分も残っている」と思うのでは、量は同じですが気持ちが変わりますね。

こんなことを思うようになったのはどうも、人生の折り返し点を過ぎた五十歳過ぎた頃からだつたような気がします。

そして、私の人生はあと十年かも知れないし、明日なのかも知れません。そのように考えると、「まだ半分」は時間の長さというより、「今日をどのように生きるか」ということに尽きるように思えます。

これはまた、「他人さまのために生きるべき方」とも言えるでしょう。

このように言う「他人さまの犠牲にな



るなど、私にはとても出来ない」という人が必ず出てきます。言いたいことは、それほど大仰なことではなく、お隣りさんや集落の人と仲良くする、飼っているネコちゃんやワンちゃんを可愛がる、或いは庭先で花を育てる、離れて暮らす子や孫と手紙や絵手紙をやり取りする、といったようなことも含めてよいと思います。

東京の、多分有名な会社を定年退職した人が、甲府から更に一時間という過疎地に、ご夫婦で移り住んでいます。夏でも二十五度より気温が上がらず、今の季節は朝の気温が氷点下一〇度だそうですが、戸数は一〇軒ほど、人口は多分二〇人足らずという『限界集落』(六五歳以上の人が五割以上で、お祭りなど集落の共同作業が出来なくなる)です。

この方は私と同年代だと思いますが、「今日は、一キロ離れたお隣のおばあさんを、甲府の歯医者さんに連れていつてきました」、「氏神様の掃除をしました」、「庭のエサ台に来ている野鳥とリスです」、「今日の富士山です」などと、毎日の何気ない暮らしぶりを、写真付きでインターネットに公開しています。

同じ過疎地に住む者として参考になることが多く、話しぶりが明るいこともあって、いつも楽しませてもらっています。

横浜の八三歳のおばあちゃんには、『80ばあちゃん戯言』の題で、戦争中の普段の話を書いて沢山の若い人たちが読者になっています。

「民主党にもう一度政権をとらせなければならぬ」などと書いて、私の意見と真つ向から衝突することもあります。「日本とアメリカが戦争したなんて知らなかったなあ。で、どっちが勝ったの？」などという、ウソ

のような人たちが多くなった近ごろでは、こういう日記はともて大事だと思いがら読ませてもらっています。

たまたまお二人のことを書きましたが、日本中にこのような方は沢山いらっしゃると思います。そして、もうお気付きのように、お二人ともご自分が楽しんでるということですね。

私たちは、大東亜戦争中の出来事など忘れたわけではないのですが、当たり前すぎて話題にしないことつて多いですね。でも今の日本を知るためには、学校で教えられなくても、知つていることを次の世代に伝えることは、私たちの役目ではないでしょうか。

厚生労働省専門班の精密な調査によると、認知症の人は平成二十五年、全国で四百六十二万人です。この数は高齢者の人口の十五%にあたるということですから、六十五歳以上の二十人に三人が認知症ということになりますし、予備軍が同じ人数といわれますから、私やあなたが、今おかしくなつても不思議ではないわけです。

この病気が厄介なのは、治療薬がないこと、本人には分からないことですね。

万一病気になるれば、家族など身内の介護が欠かせませんが、病状によってはそれにも限度があり、更に進むと福祉施設などで暮らすことになり、ただでさえ膨らみ続ける福祉予算を余計に使うことになります。

でも予防薬はあるのだそうで、「無理しない運動と、楽しく頭を使うこと」だそうです。例にあげたインターネットのお二人など、どう書けば自分の思いがよく伝わるか、どんな写真がよいかなどと、思いを巡らせながら楽しんでる様子が目に見える良い例だと思えました。

パソコン遣いが総てとはいいませんが、これも『残りの半分』を上手に使い切る方法の一つではないでしょうか。

余滴

▼明けましておめでとうございませぬ。まずまずのお天気で、のんびりと過ごさせてもらいましたが、皆様は如何でしたか。午年は大きな変化があると昔からいわれるそうですが、よい方へ“うま”く行くといひですね。▼性分が横着なのだと思うのですが、少しでも体調がおかしくなると横になってしまいます。黙ってればいいのに、ここに書いたりするのだと、読んだ人は余程大変なのだと思ひます。気をつけなさいと家内に言われてしまいました。▼ズボンをはく時、片足立ちでは足を通しにくくなつたり、起き上がる時、両手の助けが必要になつたりで、あれえ、と思うことが多くなりまし

た。身体がなまってしまったのです。慌てて散歩を心がけるようにしました。▼旧暦11月26日から12月5日まで、下立松原神社の神狩祭(おみかり)が行われます。昔、由布津主命(ゆふつぬしのみこと)が田畑を荒らす獣を退治してくださつたご恩を感謝する行事だそうです。最後の夜が『夜明かし』で、天を焦がす『おーび』に照らされて、厳かな行事が進みます。

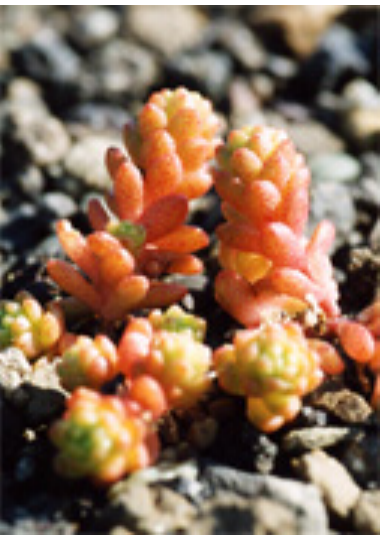
尚、住民に率先して働く神様は日本だけという、世界に珍しい文化だそうです。外国の神様は命令するだけで、汗をかくなどともないことです。

▼“春に一番近い”暖かな土地ですが、1月と2月は野草の花を探るのに苦労します。というわけで以前取り上げたこともあるタイトゴメ【ペンケイソウ科ペンケイソウ属】です。

名前について、原色牧野植物図鑑には高知県柏島の方言とありますが、インターネットの図鑑には、葉の形がアジア原産の米粒(インディカ米)に似ているから、とあります。

草丈は数センチ。波に洗われそうな岩場の僅かなくぼみを糧に群落を作り、5~7月に黄色い星形の可憐な花を咲かせます。

2014/01/08 龍渉



にっぽん人情小噺

三遊亭鳳豊

第九十六話 初めての落語

新年あけましておめでとうございます。どうぞ、今年も皆様方にとりまして、よい年になりますようお祈り申し上げますが、どうも最近、家庭内の事件が多くて困りますね。

まあ、それだけ、皆さん、生きるのがむずかしい時代になったんでございませうか。

そういえば、先日、「ああ、この家も大変なんだなあ」と思ったことかありましてね。

たしか、あの日は土曜日でした。前の晩、つまり金曜日の晩にですね、私、あるご晶肩の方に酒をごちそうになりました。その時に、「日曜日に渡したいものがあるから、家まで取りに来てくれ」と言われたんですね。

「はい、わかりました」と言って、あとはいきつけの店でおいしいお酒をいただいたんでございますがね、家に帰ってふと気づいたんですが、お宅は存じ上げていたのですが、いつうかがったらいいか、午前中か、午後か、聞くのを忘れていたことに気づいたんですね。

ほら、先方にもご都合というものがありませんから。

それで、その方のご自宅に電話を入れました。そしたら、小学生ぐらいのお嬢ちゃんが出ましてね、「はい、中村です」と。そうそう、中村部長とおっしゃるんですけどね。(ああ、そういうえば、娘さんがふたりいるっておっしゃってたな。上の子かな)なんて思いましたね、私も商売柄ついで猫なで声みたいな声で言ったんです。

「あの、私、三遊亭鳳豊っていうんですけれどね、お父さん、いる？」って。そしたらお嬢ちゃん、何と答えたと思います？

はつきりと言いましたよ。「いらない」って。

今日は、ある大学生のお話をしたいと思います。

昨年の秋、私はある大学の教授に誘われて、地方の大学の文化祭にお邪魔したんです。大学の文化祭って、なかなかいいもんですね。なんで呼ばれたかといいますが、文化祭に落語をやる学生がいるから、聞いてくれないかというんですよ。

(ああ、落語研究会の発表会か)と思っただんですがね、どうやらそうではないらしい。たつたひとりで企画し、学校の承認をとりつけ、教室で友達を集めて落語をやるというんです。めずらしいですよ、いまどき、そんな男の子って。

で、その教授といっしょに、教室に行きました。すると、浴衣姿の学生が出てきて、いきなり机の上に置かれた座布団の上に座って、落語をはじめたんです。客席は、女の子でいっぱいなんです。彼がはじめたのは「初天神」という噺です。ご存知でしょうか。

それは、こんな噺です。ちよつと聞いてもらえますか？

天神様のご縁日の夜、出かけようとする、キン坊が家に帰ってきます。

「お父つっあん、どこ行くの?」「仕事だ」「うそつけえ、仕事はここんところあぶれるじゃねえか。おつかあに聞いて知ってるぞ。女房を泣かせるんじゃねえや」「うるせえな、お前は「天神様に行こうつてんだろ。あたしも連れていっておくれよ、ねえねえ、お父つっあん」「ダメだ、ダメだ。お前はな、どこかに連れて行くと、あれ買ってくれ、これ買ってくれってうるさいからダメだ」「わかった、絶対に言わないから連れてってくれよ。男の約束だ」「何が男の約束だ。いいか、もし、お前が買ってくれって言ったら川に放り投

げるからな、川には河童がいてな、お前の体をガリガリ食べちゃうぞ」「何言ってるんだよ、お父つっあん。河童と言うのは、架空の動物だよ。柳田国男の遠野物語にも出てくる伝説上の生き物なんだ。そんなことも知らないで、よくお父つっあん、子どもをここまで育ててきたな」

しかたなく、キン坊を天神様の縁日に連れて行きます。

「ねえ、お父つっあん、あそこの親子みたいに手をつないでブラブラ揺すっておくれよ」「わかった、じゃあ、いくぞ、ほら、いくち、にくさんと」

「うれしいな、お父つっあん、今度はあつちの子みたいに肩車してくれよ」「よし、よしよつと。お前、重たくなつたな」「わ、よく見える、見える、ああ、団子屋だ、お父つっあん、団子買っておくれよ」「ダメだつて言っただろ。お前、ほら、下ろすぞ。男の約束だろう」「買ってよ、買ってよ、お父つっあん、買ってくれよ、え、くん」

と、まだ噺は続くのですが、この大学生のうまいこと、うまいこと。私も教授も驚きました。しかも、教授に聞けば、今日、はじめて人の前で演じたというのです。

もちろん、女子大生たちが大笑いして、教室中、割れんばかりの拍手でたつたひとりの落語発表会は終わりました。

教授のはからいで、夜、彼とその仲間たち、そして彼のお母さんといっしょに学生食堂でささやかな打ち揚げが行われました。その席上でのことです。お母さんが泣いているのです。彼は、やさしくお母さんの肩を抱いていました。

「どうしたんですか?」何も知らない私は、お母さんに声をかけました。お母さんは私にこう話したのです。「この子は小さい時から引つ込み思案で、友達もいない子でした。それというの、私のせいなんです。実は、私、この子がまだ幼い頃に

失火のお詫びとお見舞いへのお礼
去る12月12日午前11時半頃、あそか工芸の工場から出火し、瞬間に燃え広がって機械工具や出荷前の製品など全焼しました。
消防団OBの皆さんなど、サイレンが鳴る前に駆けつけ、消火栓からの素早い消火活動で、本当に幸いなことに、間一髪、隣接の本堂などへの延焼を食い止めたが、お檀家を始め地域の皆様には大変なご迷惑とご心配をおかけいたしました。
にもかかわらず、多くの皆様にお見舞いや励ましを戴き、本当に暖かいお気持ちに感謝申し上げます。尚、総代の皆様をお願いして、参道下の駐車場に移転しての再開の運びになりました。

離婚したんです。だから、この子は父親を知りません。そんな子が『お母さん、今度、俺、大学の文化祭で落語をやるから見てくれ』って。『大学に頼んで、教室も借りたから。友達も応援してくれるって』と言ったので、どうしたんだろうって思ってた今日、やってきたら……」

あとは、言葉にならない。私は彼に聞きました。「落語はどこで覚えたの?」「ユー・チューブで」。それだけで十分でした。なぜ、「初天神」なのか、その理由もわかりました。

この落語のように、彼は父親にずっと甘えたかったのでしょう。手をつないで歩きたかったし、肩車してもらっていい子がずっとうらやましかつたのでしよう。でも、我慢し続けた。それが、この落語で爆発したのではないのでしょうか。「団子買ってくれよ、お父つっあん」。上手だったわけですね。別れ際に涙で目をはらしたお母さんが私にこう言って、息子さんとお帰りになりました。

「別れた夫は、結婚式で司会を引き受けるような明るい人でしたから、似てきたんで、思わず涙が……。一度は心から愛した人ですから」

「勿体ない」の心がけ
60~70年前の今ごろの季節、おかずは明けても暮れてもハバノリばかりだったような気がします。極くまれに釣り針で作ったワナで捕った、ヒヨドリやアカハラをみじんに叩き、鍋に山盛りのネギと一緒に煮たおかずが出ました。その美味しかったこと。秋、値下がりしたサンマを買って、樽に塩漬けて少しづつ食べました。そのし

よっぱかったことを未だに覚えています。ご飯は米と丸麦半々ぐらだったか。大麦は火の通りが遅いので、「います」といって前もって茹でましたね。
学校に行く子供は弁当は、愛情と見栄でお米の多いところを詰めてくれました。大麦は粘りが少ないので美味しくはないですね。
農家でさえこうでしたから、引揚げのご家族や疎開のおうちは大変なご苦労でした。栄養不良で肌の透き通った級友の一人は、昼時間には外で日向ぼっこをしていました。
冬の夜は、なかなか身体が温まりませんでしたし、蒸し暑い夏の夜は寝つけませんでした。今、食料の何十%は捨てているそうです。日本人の本領「勿体ない」心を取り戻さないこの先の地球が心配です。

